

2024 年度 流通科学大学
卒業後アンケート調査結果報告書

流通科学大学

2025 年 8 月

目次

I. 調査概要	p.2
II. 調査結果	
1. あなた自身のことについてお聞きします	p.3
(問 1 ~3)	
2. あなたの現状についてお聞きします	p.4
(問 4)	
3. 本学在籍時、卒業後の教育内容に対する意識についてお聞きします	p.5
(問 5~14)	
4. 本学の教育やサービスについての改善点や後輩へのメッセージについて ...	p.15
(問 15~17)	
III. 卒業生アンケート(卒業後の既卒者向けアンケート)についての総括	p.18

I. 調査概要

1. 調査の目的

本調査は、本学における内部質保証活動の一環として、本学の提供する教育が卒業生にどのような学習成果をもたらしたのかを、点検・評価するために実施する。

2. 調査対象

流通科学大学・全卒業生

3. 調査方法

オンライン調査（同窓会誌に Microsoft Forms による回答フォームの URL の QR コードを掲示して回答を収集）

4. 調査期間

2024 年 12 月下旬から 2025 年 3 月 31 日（月）

5. 回収状況

有効回答数 265 件

6. アンケート序文

昨年度は多数の卒業生のみなさまにアンケートへのご回答をいただき、誠にありがとうございました。本年度もアンケートにご協力をお願いいたします。今回は質問の数を絞り、5 分から 10 分ほどで回答いただけるようにいたしました。今後とも本学が進化を続けるために、寄せられた卒業生の声を、引き続き、本学が提供する教育プログラムの改善につなげていきたいと考えています。

つきましては、ぜひ、右の特設サイトから、ご回答をお寄せください。（ご回答〆切：2025 年 3 月 31 日（月）まで）

なお、ご回答内容は本学のプライバシー・ポリシーに則り厳正に管理いたしますので、卒業生のみなさまの率直なお考えをお知らせくださるようお願いいたします。

Ⅱ. 調査結果

1. あなた自身のことについてお聞きします。

問 1. あなたが入学した年度をお選びください。

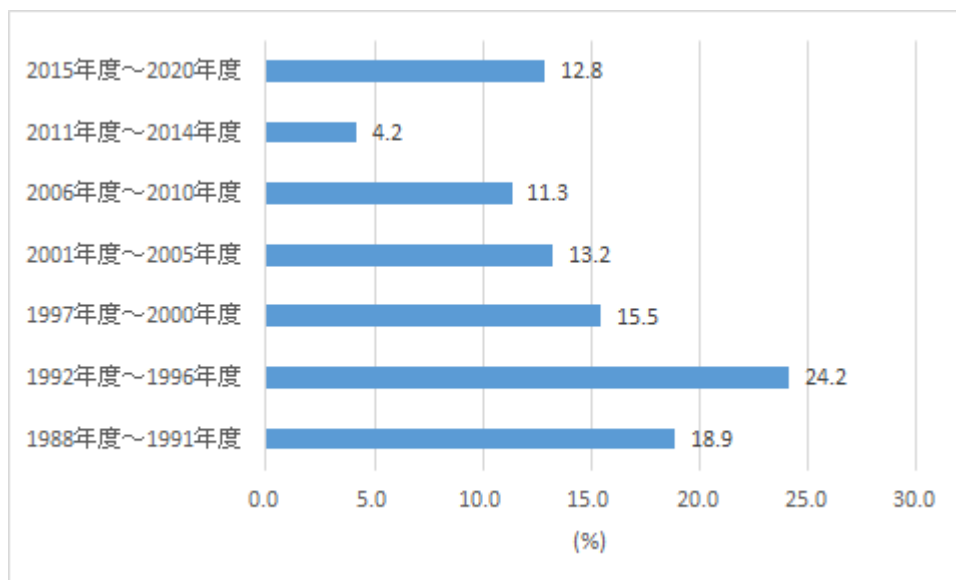


図 1. 入学した年度

問 2. あなたが入学した学部・大学院をお選びください。

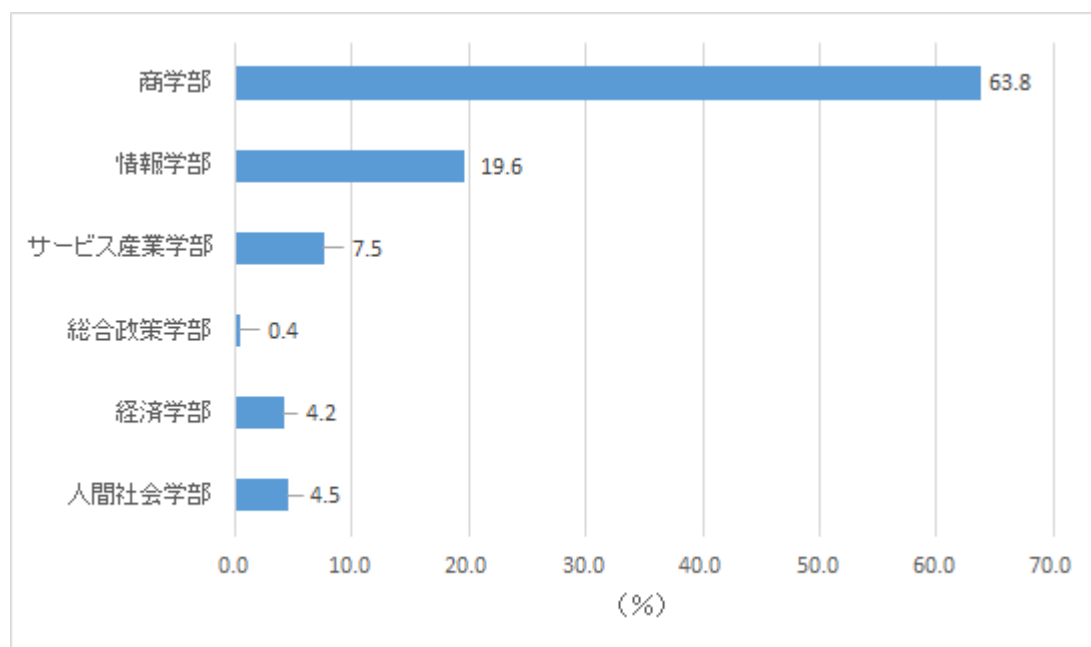


図 2. 入学した学部・大学院

問 3. あなたの性別をお選びください。

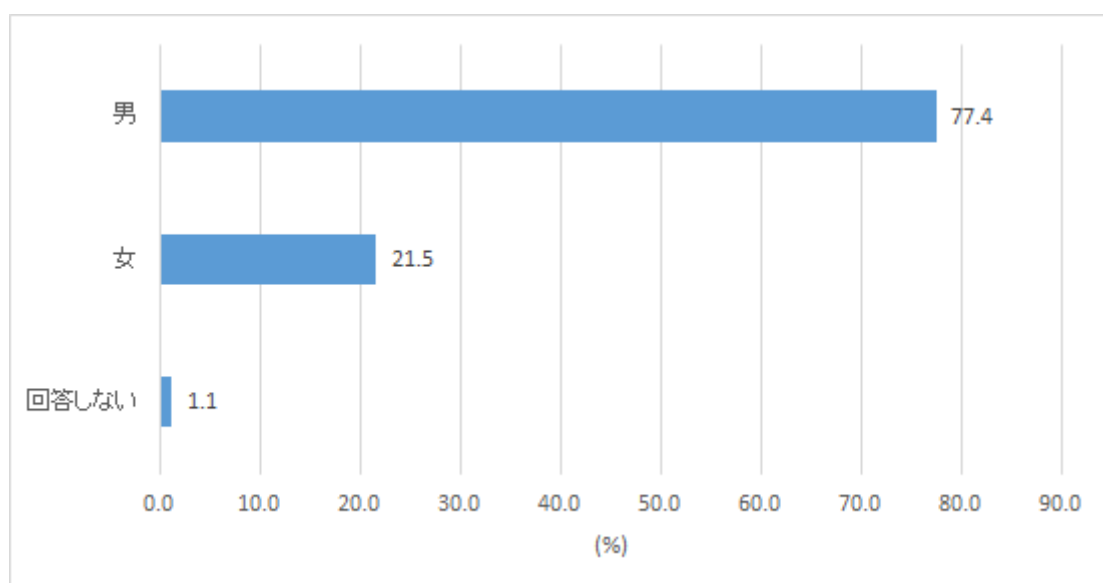


図 3. 性別

2. あなたの現状についてお聞きします。

問 4. あなたの現在の進路状況等について、該当するものをお選びください（複数回答可）。

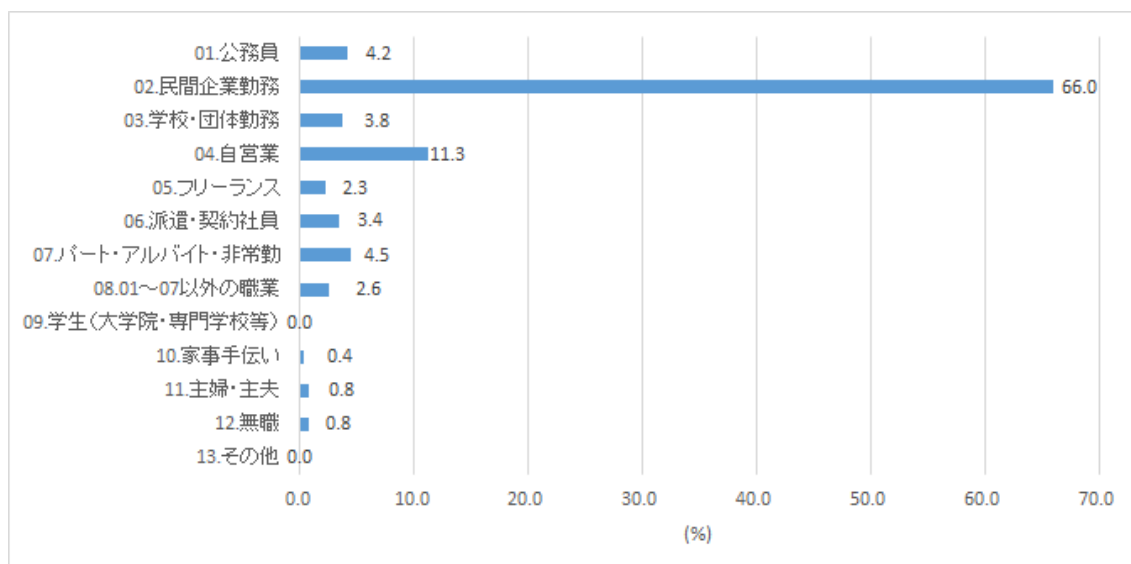


図 4. 現在の進路状況等

結果によると、「民間企業勤務」が 66.0%と最も高い割合を占めており、卒業生の多くが民間企業で活躍している。次に割合が高いのは「自営業」の 11.3%である。これは、流通科学大学の教育が、起業を目指す学生や、既存の家業を継ぐ学生にとっても有効な知識やスキルを提供している可能性を示唆している。その他、「パート・アルバイト・非常勤」、「公務

員」、「学校・団体勤務」、「派遣・契約社員」、「フリーランス」が続く。これらの結果から、卒業生の進路が多様であること、また、必ずしも正規雇用だけではなく、柔軟な働き方を選択する卒業生も一定数いることがうかがえる。

3. 本学在籍時、卒業後の教育内容に対する意識についてお聞きします。

問 5. 自己発見とキャリア開発または基礎演習について※2019 年度以降の入学生：自己発見とキャリア開発 A、B、2015 年～2018 年度入学生：自己発見とキャリア開発、2014 年度入学生以前：基礎演習

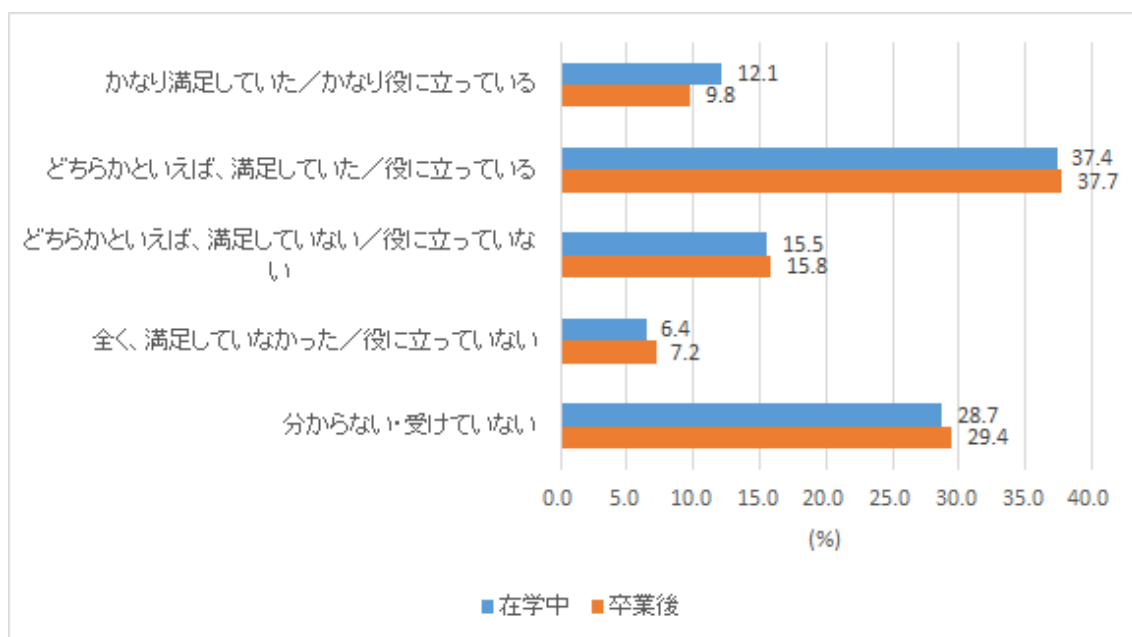


図 5. 自己発見とキャリア開発または基礎演習

結果によると、この科目に対する満足度・有用性については、在学中と卒業後で評価に大きな差がないことが明らかになった。「かなり満足していた／かなり役に立っている」(在学中: 12.1%、卒業後: 9.8%)、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」(在学中: 37.4%、卒業後: 37.7%)。これらの結果を合わせると、約 50%の卒業生が在学中および卒業後もこの科目に対して肯定的な評価をしていることが分かる。「自己発見とキャリア開発」または「基礎演習」は、多くの卒業生にとって大学生活の基礎を築き、キャリア形成に役立つ科目として評価されていることが確認された。在学中と卒業後の評価に大きな乖離がないことから、この科目が長期的な視点で見ても有用であると認識されていると言える。

しかしながら、約 2 割の卒業生が不満を感じているという点は、今後のカリキュラム改善において検討すべき課題となる。これらの学生がどのような点に不満を感じているのか、具体的な意見をさらに深掘りすることで、より質の高い教育内容へと改善していく余地があると考えられる。

問 6. 一般教養科目について

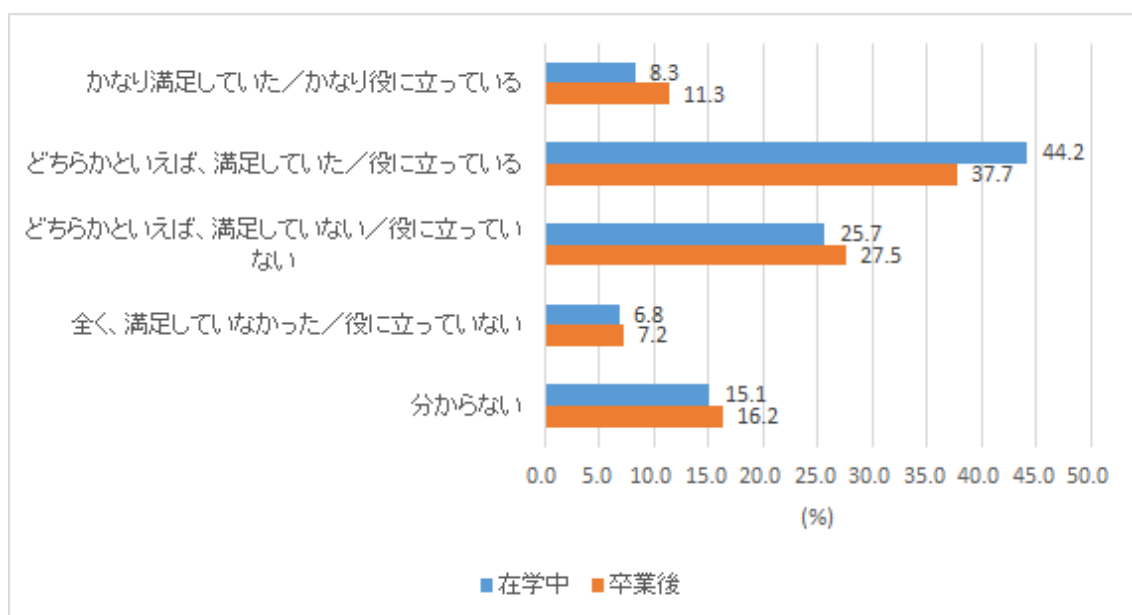


図 6. 一般教養科目

「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」を合わせると、在学中は 52.5%、卒業後は 49.0%と、半数程度の卒業生が一般教養科目に対して肯定的な評価をしている。特に注目すべきは、卒業後に「かなり満足していた／かなり役に立っている」という回答が在学中の 8.3%から 11.3%へと増加している点である。これは、社会に出てから一般教養科目で培った知識や視野の広さが、実社会で役立つと実感する機会が増えた可能性を示唆している。例えば、多様な背景を持つ人々とコミュニケーションを取る際や、複雑な社会問題を理解する上で、一般教養が基礎的な教養として機能しているのかもしれない。

一方で、「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」を合わせると、在学中・卒業後ともに約 3 割の卒業生が一般教養科目に否定的な評価をしている。この割合は、先に分析した「自己発見とキャリア開発または基礎演習」の約 2 割と比較するとやや高く、改善の余地があると考えられる。

問 7. 外国語科目について

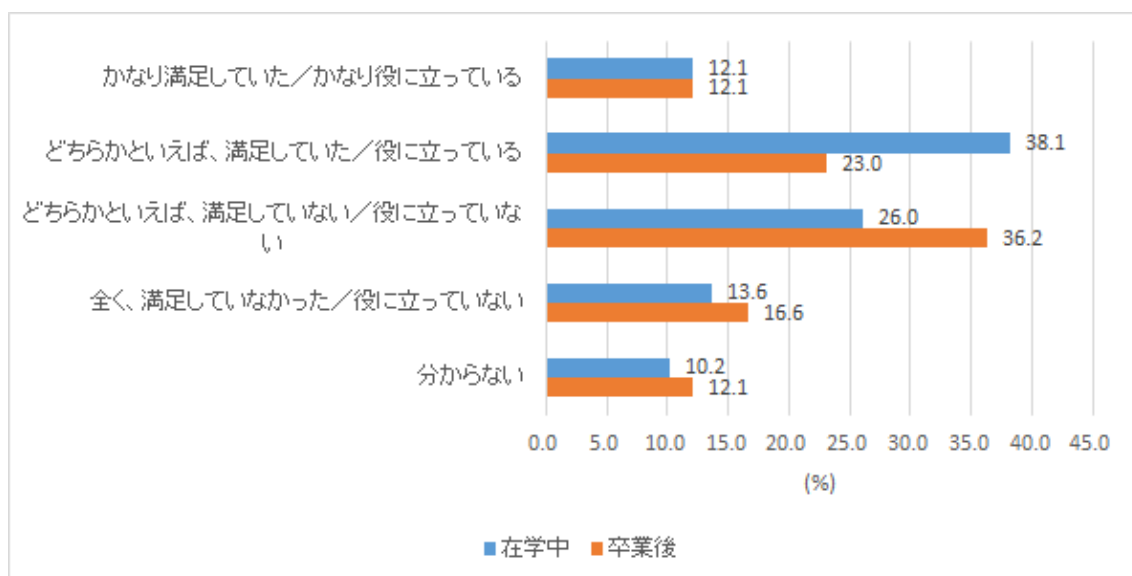


図 7. 外国語科目

外国語科目に関して最も顕著なのは、卒業後に満足度・有用性の評価が大きく低下している点である。「かなり満足していた／かなり役に立っている」は在学中と卒業後で同じ割合（12.1%）であるが、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」は在学中の 38.1% から卒業後には 23.0%へと大幅に減少している。

これに伴い、否定的な評価、つまり「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」を合わせた割合は、在学中の 39.6%から卒業後には 52.8%へと増加している。

以上の結果は、在学中における外国語学習に対する期待や満足感の有無に関わらず、外国語学習への評価が卒業後に顕著に低下していることを示している。つまり、多くの卒業生が社会に出てから在学中に獲得した外国語のスキルに対して、「役に立っていない」と感じている可能性がある。ここから、実際の実務において外国語スキルを発揮する場面が少ない可能性があるかと推察することができる。とはいえ、グローバル化が進む現代において、外国語能力の重要性は認識されており、本学では引き続き実務レベルにより対応できる外国語科目の提供を行う必要があるだろう。

問 8. 情報処理科目について

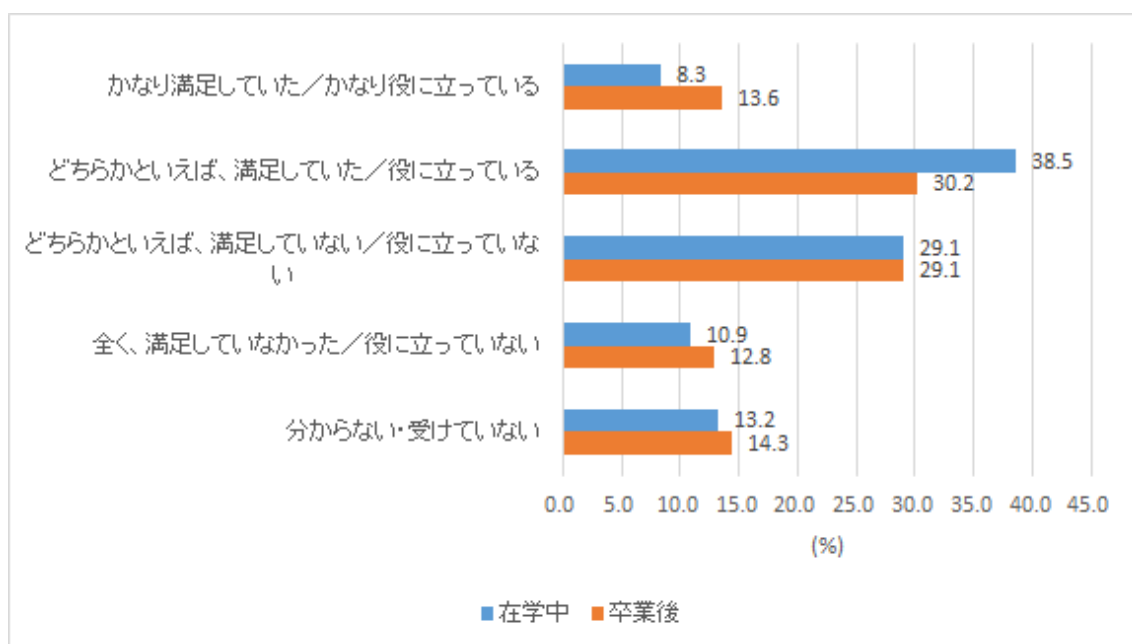


図 8. 情報処理科目

情報処理科目において最も注目すべき点は、卒業後に「かなり満足していた／かなり役に立っている」と回答した割合が、在学中の 8.3%から 13.6%へと大きく増加していることである。これは、社会に出てから情報処理スキルが実務で不可欠であることを実感し、その重要性を再認識する卒業生が多いことを示唆している。現代社会におけるデジタル化の進展を考えれば、情報処理能力は業種を問わず基礎的なビジネススキルとなっているため、この傾向は非常に納得できる。

一方で、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の割合は在学中より減少しており、「全く、満足していなかった／役に立っていない」という回答は、在学中の 10.9%から卒業後に 12.8%へと微増している。このことは、情報処理科目の内容が一部の卒業生にとっては、実務に結びつかなかった、あるいは自身のキャリアパスと合致しなかったと感じられている可能性を示唆している。例えば、基本的な PC 操作にとどまる内容であったり、学生が求めるより専門的・応用的なスキル習得には至らなかったといったケースが考えられる。

問 9. 健康スポーツ関連科目について

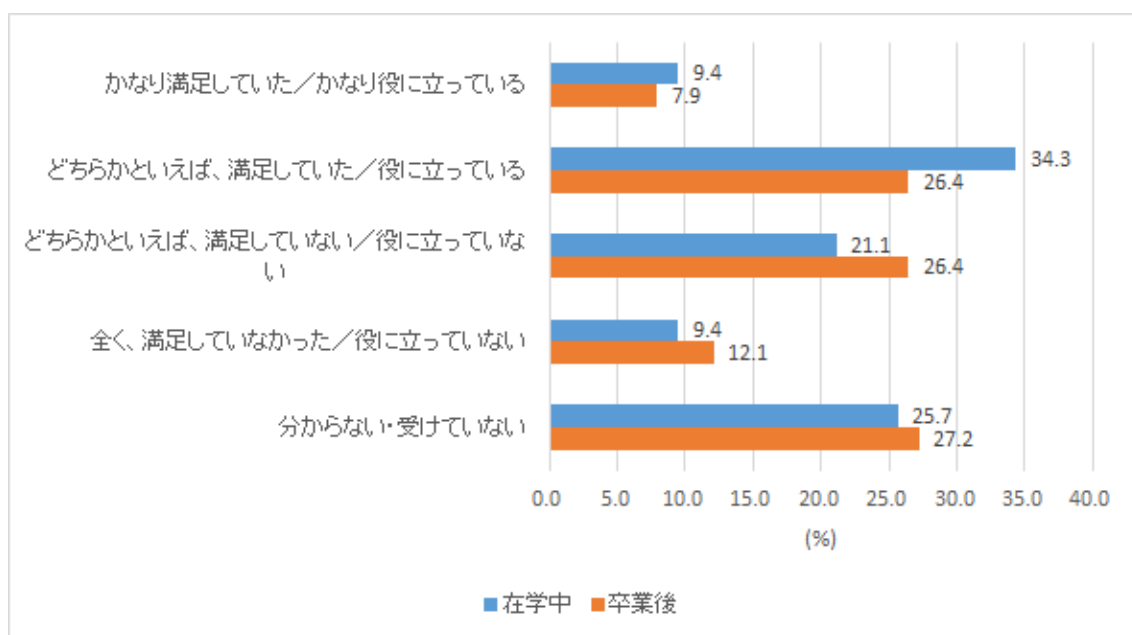


図 9. 健康スポーツ関連科目

健康スポーツ科目についても、外国語科目と同様に、卒業後に満足度・有用性の評価が低下する傾向が見られる。肯定的な評価（「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の合計）は、在学中の 43.7%から卒業後には 34.3%へと減少している。特に「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の減少幅が大きく、卒業後に「そこまで役立っていると感じない」という声が増えていることがうかがえる。

一方で、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中の 30.5%から卒業後には 38.5%へと増加している。

これは、多くの卒業生が、在学中に期待していた身体活動や健康増進の機会が、卒業後の実生活やキャリアにおいて直接的に役立つと感じる機会が少ないことを示唆しているかもしれない。社会人になると、運動習慣の維持が難しくなったり、健康に関する知識を実践する場が限られたりすることが考えられる。

問 10. キャリア科目について

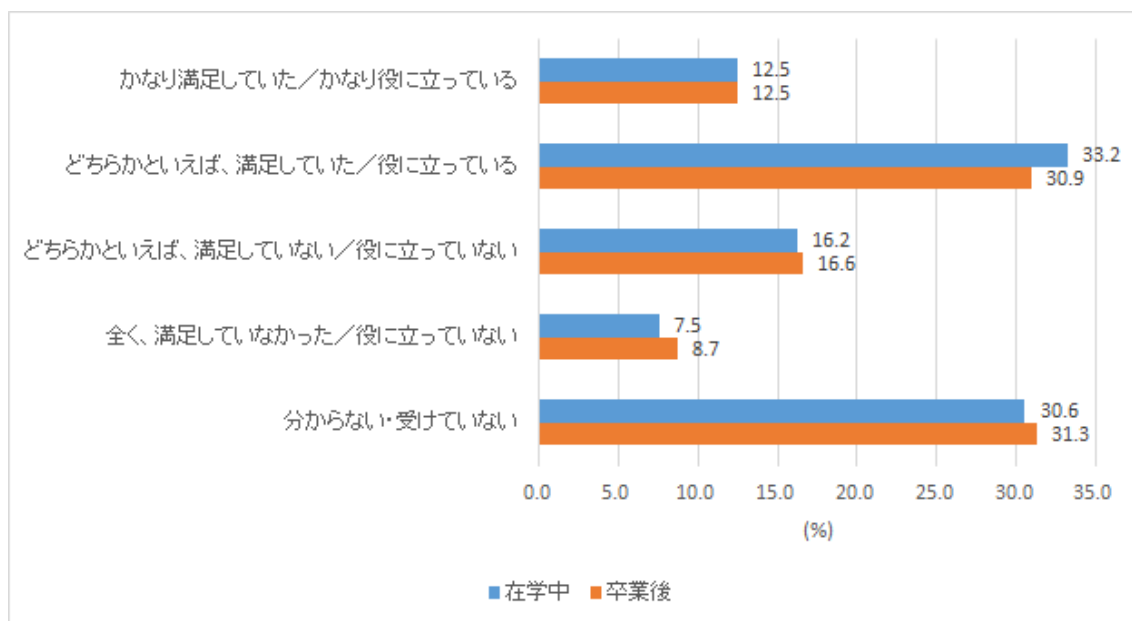


図 10. キャリア科目

キャリア科目に関して最も顕著なのは、在学中と卒業後の評価に大きな変動がない点である。特に「かなり満足していた／かなり役に立っている」の割合がどちらの時点でも 12.5% と同じであり、肯定的な評価を維持していることが伺える。

肯定的な評価（「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の合計）は、在学中が 45.7%、卒業後が 43.4%と、半数近くの卒業生がキャリア科目に対して肯定的な評価をしている。これは、キャリア形成支援という科目の性質上、卒業後の実社会で役立つ内容が多く含まれているためと考えられる。

一方で、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中が 23.7%、卒業後が 25.3%と、約 4 人に 1 人の卒業生がキャリア科目に不満を感じていることが分かる。この割合は、先に分析した「自己発見とキャリア開発または基礎演習」の満足していない層（約 2 割）と類似しており、キャリア関連科目全体で一定数の課題を抱えている可能性を示唆している。

問 11. インターンシップについて

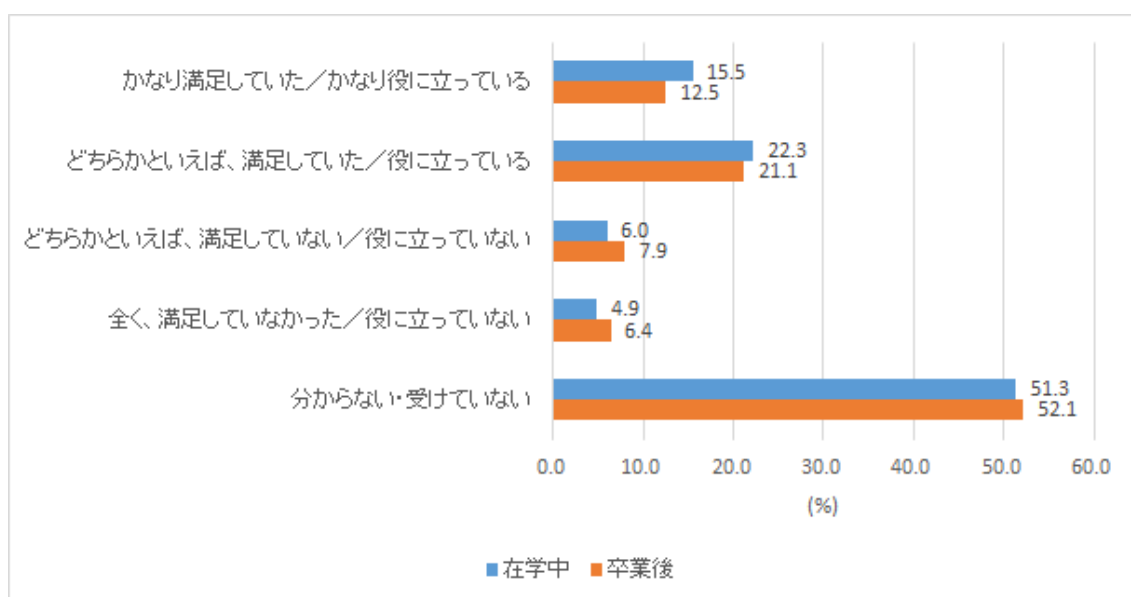


図 11. インターンシップ

インターンシップを経験した学生に限って見ると、肯定的な評価（「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の合計）は在学中が 37.8%、卒業後が 33.6%である。これは、インターンシップがキャリア形成において一定の役割を果たしていることを示している。特に「かなり満足していた／かなり役に立っている」は在学中 15.5%と、他の科目と比較しても高い部類に入る。インターンシップは、経験した学生にとっては概ね肯定的に評価されているものの、受けている学生が半数程度に留まっている点が最大の課題である。

しかし、卒業後にはこの「かなり満足していた／かなり役に立っている」が微減しており、それに伴い否定的な評価も若干増加していることから、実際に社会に出てから「もう少しこうだったら」と感じる点が出てくる可能性も考えられる。

問 12. 学部専門科目について

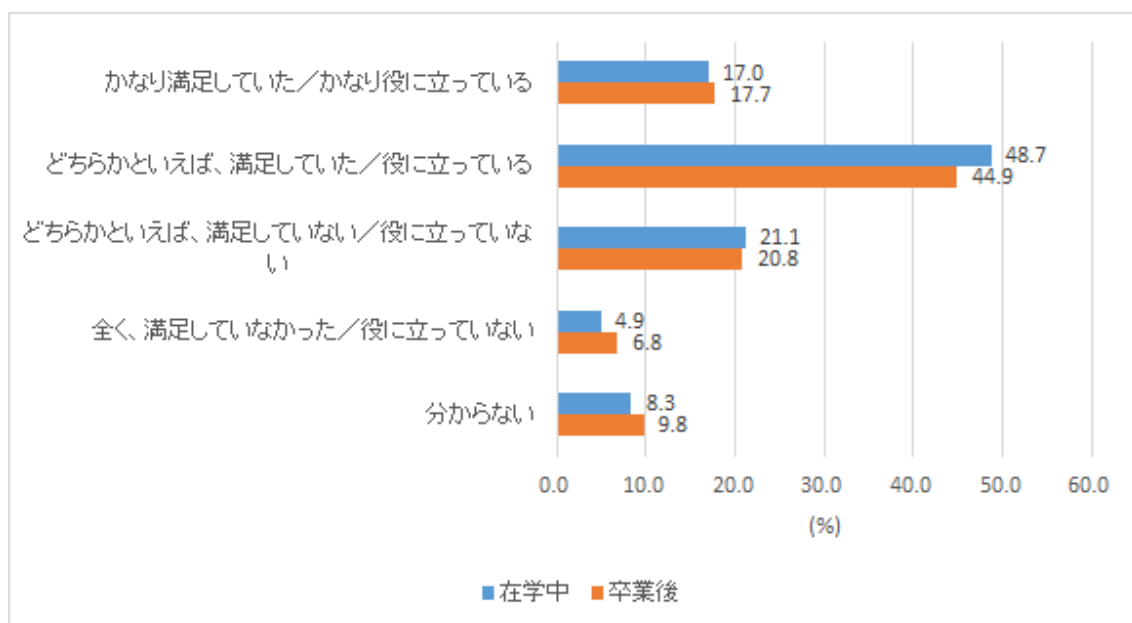


図 12. 学部専門科目

学部専門科目は、これまでに分析した他の科目と比較して、最も高い肯定的な評価を得ている。「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」を合わせた肯定的な評価は、在学中が 65.7%、卒業後が 62.6%と、圧倒的な多数を占めている。特に「かなり満足していた／かなり役に立っている」の割合は、在学中と卒業後でほぼ横ばいであり、卒業後も専門科目の知識やスキルが実社会で役立っていると感じている卒業生が多いことを示している。これは、流通科学大学の専門教育が、学生のキャリア形成に直結し、社会で通用する専門性を身につけさせている証拠と言える。また、在学中と卒業後の評価の変動は少なく、卒業後も概ね肯定的な評価が維持されている。これは、専門科目の教育内容が学生の期待に応え、実社会での応用性を有していることを示唆している。

一方で、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中が 26.0%、卒業後が 27.6%と、約 4 人に 1 人の卒業生が不満を感じていることも見過ごせない。これは、専門科目が多様な学生の興味や、変化する業界のニーズに完全には対応しきれていない可能性を示唆しているかもしれない。

問 13. 研究演習（ゼミ）について

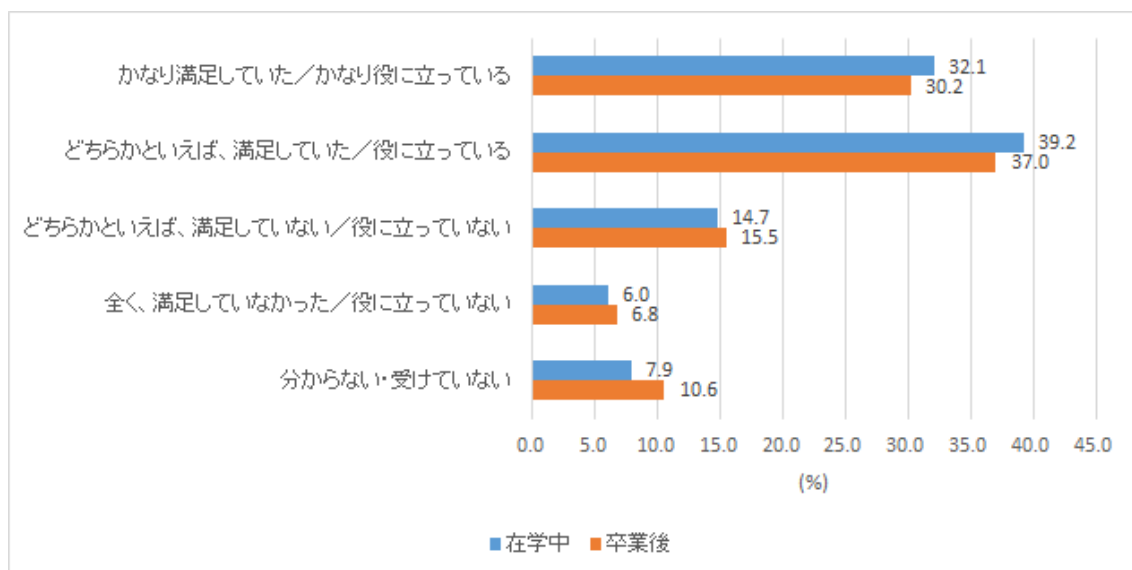


図 13. 研究演習（ゼミ）

研究演習（ゼミ）は、今回の調査項目の中でも非常に高い満足度と有用性の評価を得ている。肯定的な評価（「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の合計）は、在学中が 71.3%、卒業後が 67.2%と、圧倒的多数の卒業生がゼミを高く評価している。一方で、「かなり満足していた／かなり役に立っている」、「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」が卒業後ではやや減少している。これは、ゼミで培った専門的な探求能力、プレゼンテーション能力、議論力、問題解決能力などが、在学中に行う様々な活動において非常に役立つと実感した、そして卒業後もそれらの経験を振り返って実感しているものの、社会に出てからは実際の実務レベルにおいてはその有用性が実感しにくくなっている可能性を示唆している。とはいえ、少人数制であるゼミの特性上、教員や学生間の密なコミュニケーションを通じて深い学びが得られることが、卒業後の高い評価に繋がっていると考えられる。

一方で、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中が 20.7%、卒業後が 22.3%と、他の科目と比較しても低く抑えられている。これは、ゼミが学生のニーズや学習目標に比較的合致していることを示している。

問 14. 卒業論文について

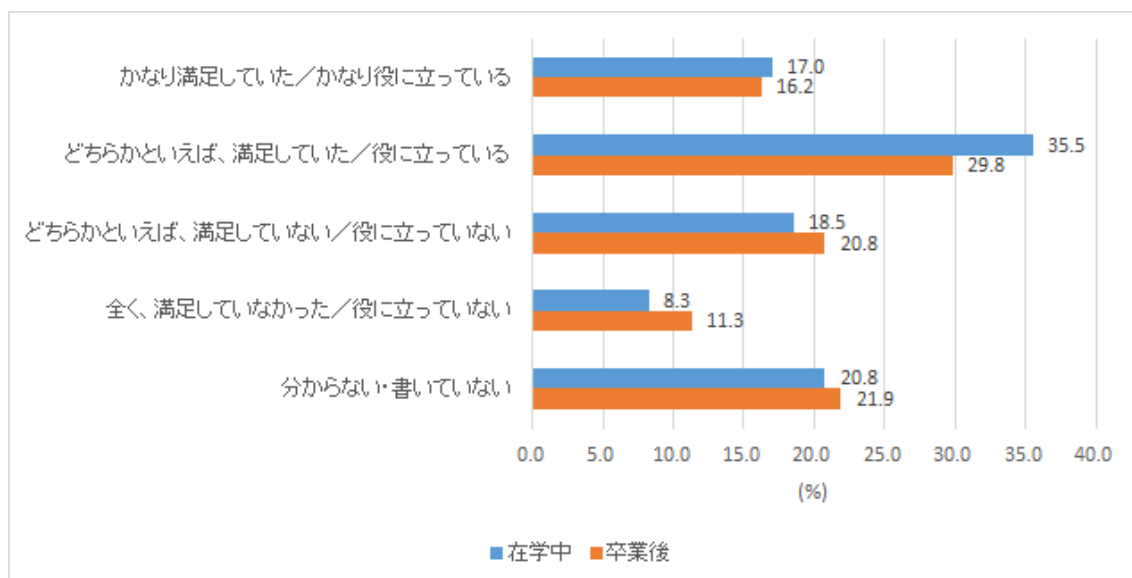


図 14. 卒業論文

まず注目すべきは、在学中、卒業後ともに約 2 割の卒業生が「分からない・書いていない」と回答している点である。これは、卒業論文が必修ではなかったために、多くの学生が選択しない実態がある。卒業論文を「書いた」学生に限定して見ると、肯定的な評価（「かなり満足していた／かなり役に立っている」と「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の合計）は在学中が 52.5%から卒業後は 46.0%へと減少している。特に「どちらかといえば、満足していた／役に立っている」の減少幅が目立つ。

これに伴い、否定的な評価（「どちらかといえば、満足していない／役に立っていない」と「全く、満足していなかった／役に立っていない」の合計）は、在学中の 26.8%から卒業後には 32.1%へと増加している。

この傾向は、卒業論文に取り組んだ時点では達成感や一定の満足度があったものの、社会に出てから、その内容やプロセスが実務に直接的に役立つと感じる機会が少なかった、あるいは期待したほどではなかったと感じている卒業生がいる可能性を示唆している。研究テーマの実用性、論文作成プロセスにおける指導の質、または得られたスキルと社会のニーズとのギャップなどが影響しているのかもしれない。

4. 本学の教育やサービスについての改善点や後輩へのメッセージについて

問 15. 本学の教育方法、カリキュラム、授業の内容、教員の指導方法などの教育面について、良かったので継続してほしい点や改善すべき点がありますか。具体的に記入してください。

先ほどまでは、定量的なデータに基づいて各要素の関連や卒業生の実態について見てきたが、それだけではなかなか見えてこないものもある。そこでここでは、「本学の教育方法、カリキュラム、授業の内容、教員の指導方法などの教育面について」について自由記述で回答を求めた結果を見ていきたい。網羅的に提示することができないため、ユーザーローカルのテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて自動要約したものを図 15 に示す。

数名の卒業生が自らの大学生活や教育経験についての意見を述べています。彼らは、特に自身の経験したゼミやカリキュラムにおける実践的な学びの価値を強調しています。また、留学や企業との連携教育が実社会で役立ったと感じており、今後もそのような機会を増やすべきだと提言しています。例えば、一部の学生は英語や外国語教育の向上を望み、実際に業界で活躍している教授陣による授業の重要性を挙げています。その中で、就職セミナーでの経験や教員との距離感が今後の教育にどう影響を与えるかについても触れています。また、ゼミの自由度や実務に基づく教育が、自身の業務において役立っていると評価する意見も多く見られます。

一方で、教育内容の改善点を指摘する意見もありました。特に、講義のペースや授業の内容に対する不満、学生のレベル低下を危惧する声があります。また、企業論特講など、業界の最前線にいる方からの講義を通じて、学生が実社会のニーズを理解することが重要であると訴えています。さらに、講義の形式に関しても、実学に基づいたカリキュラムの強化や、理論と実践を交えた教育の必要性が指摘されています。実際に企業への訪問やインターンシップを通じて、現場の声を学べる機会が大切だという意見が多かったです。

結論として、卒業生は学校での教育の実践的側面や社会での役立ちを重視していますが、さらなる改善点があると認識しています。特に、実学の精神を持ったカリキュラムの継続的な見直しを通じて、より実践的な知識を身につけることが今後求められるでしょう。

図 15. 本学の教育面についての要約

結論として、流通科学大学の卒業生は、本学の実践的な教育が社会での有用性に繋がることを高く評価しているが、さらなる改善点があることも明確に認識している。

今後、本学は、実学の精神を持ったカリキュラムの継続的な見直しを通じて、より実践的な知識とスキルを学生に身につけさせることが求められる。具体的には、実社会での経験を有する多様な人材からの知見を教育へ取り入れること、そして企業との連携強化による多様な学びの機会提供が、卒業生の期待に応え、本学の教育の質をさらに高める鍵となるだろう。

問 16. 本学の施設・設備面や、履修・生活・就職・健康などの相談や指導などのサービス面について、良かったので継続してほしい点や改善すべき点はありますか。具体的に記入してください。

続いて、「本学の施設・設備面や、履修・生活・就職・健康などの相談や指導などのサービス面について」について自由記述で回答を求めた結果を見ていきたい。網羅的に提示することができないため、ユーザーローカル社のテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて自動要約したものを図 16 に示す。

卒業生は、大学の偏差値低下に対して恥ずかしさを感じており、最低でも偏差値 50 は維持してほしいと考えています。また、実務的なスキルが求められる中、就職面での相談にもっと乗ってほしかったとの意見がありました。食堂や駐車場の便利さを評価しつつ、設備は整っているものの、就職支援が期待外れだったことに残念さを示しています。

小さな学校ならではのアットホームさも良かったと思われており、国家資格取得の支援や、設備を活用する部活動への参加者が少ない点も指摘されています。車で通学できることや、飲食施設の質の向上が望まれています。卒業生として、企業に就職する自身の経験を語る中で、学生には大企業に挑戦する環境を提供すべきという意見がありました。食堂の充実ぶりや職員との距離感も良い印象を抱かれています。図書館の蔵書数や施設の活用不足に対する不満も見受けられます。就職活動において、より具体的な支援を求める声や、専門的な知識を持つ学生のための環境を整える大切さも述べられています。

また、教材や授業の質に満足している一方で、大学がもっと学生の自立心を促す教育を行ってほしいといった意見や、就職支援が手厚かったとの感謝の言及もあります。最後に、現役の学生に対しても大学生活への積極的な参加や、より多様なメニューの学食の提供、施設の使い方に関するサポートの改善が求められている様子が伺えます。

図 16. 本学のサービス面についての要約

本学の施設・サービスは、一部に高評価を得ているものの、卒業生のニーズはより多様化し、高度になっていることが明らかになった。特に、大学のブランド力（偏差値）への意識と、実社会で求められる多様なキャリアパスへの就職支援の強化が喫緊の課題である。

今後、本学は、学生が主体的に学び、自らのキャリアを切り拓く力を養えるよう、就職支援においてはより個別かつ多角的な情報提供を行うべきである。また、施設面では、図書館の充実や、既存設備の学生による積極的な活用を促す施策が求められる。これらの改善を通じて、卒業生が自身の母校に対し、より強い誇りと満足感を抱けるような大学運営を進めることが期待される。

問 17. 最後に、卒業生として、流通科学大学で学んでいる後輩学生に対して、学生時代にやっておくべきことについてのメッセージがあれば、ご記入ください。

最後に、「卒業生として、流通科学大学で学んでいる後輩学生に対して、学生時代にやっておくべきことについてのメッセージ」について自由記述で回答を求めた結果を見ていきたい。網羅的に提示することができないため、ユーザーローカル社のテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて自動要約したものを図 17 に示す。

流通科学大学で学ぶことは社会での役立ちを考え、主体的に学ぶ姿勢が重要です。例えば、簿記や会計の知識は在学中に身に付けておくべきであり、しっかりした勉強を心がける必要があります。大学での学びにおいては、論理的思考や語学力の向上が不可欠であり、視野を広げる活動への参加も推奨されます。大学は人生の一時期に過ぎず、長いテーマを見つけるためにも多くの社会体験を重ねることが大切です。

新卒の就職活動だけに固執せず、興味ややりたいことに向かって前進してください。海外在住の経験を通じて、日本の就職活動の在り方に疑問を持つようになったという意見もあります。また、本を読むことや情報収集の習慣を身につけて、有意義な大学生活を送ることを心掛けましょう。

自己と対話し、自分が何をしたいのか、何をしたくないのかを明確にすることが他者との関係においても重要です。資格や専門知識を積極的に取得し、自分で調べ、考え、実行する力を養うことが求められます。卒業後にサラリーマンとしての経験を経て起業した例も示して、視野の広さが成功に繋がることを理解するべきです。

さらに、学校生活や社会経験を通じて、友人や人脈を形成することも欠かせません。時間の使い方を工夫し、学生時代の特別な経験が将来への資産となることを忘れないでください。また、ボランティア活動やアルバイトを通じて、現場の感覚を掴むことも大切です。社会に出る前に基本的な知識やスキルを身に付け、自分自身の将来に向けて計画を立てることが必要です。特に、数年後を見越して自分の目標を設定し、努力を続けることが成功への道を開く鍵です。たくさんの体験を積むことで、将来のキャリアに役立つ基盤を築くことができるでしょう。

教育機関での学びを通じて自分のスキルを磨き、実社会に役立つ情報を得ることは、社会人としてのキャリアを築く上で非常に重要です。社会の動向を分析し、興味を持ってしまふことが、思わぬ良い結果をもたらすことになります。たくさんの経験を積み、広い視野を持つことで、将来の選択肢を広げられますし、挑戦が成長に繋がることを忘れないでください。

大学生のうちは、様々な活動に挑戦し、失敗を恐れずに学びを楽しむことが最も大事です。どのような経験でも、後になって重要な財産になることがあります。専門的な講義や資格取得にも力を入れ、社会に出るための基盤をしっかり築いてください。こうした活動を通じて、自分の興味や関心を深め、より豊かな人生を築くための糧としてください。最後に、社会に出てから役立つような知識やスキルを持ち続けられるよう、学生生活を充実させることを心がけ、将来に向けた準備を怠らず、充実した4年間を過ごしてほしいと思います。

図 17. 後輩へのメッセージの要約

卒業生からのメッセージは、流通科学大学での学びが社会で役立つことを前提に、後輩学生に対して、主体的な学習態度、実践的なスキル習得、多様な経験による視野の拡大、そして自己理解と人間関係の構築という多角的なアドバイスを送っている。社会人になると自己啓発の時間が制限されるため、学生時代の自由な時間を最大限に活用し、将来に向けた基盤を築くことの重要性が繰り返し強調されている。これらのメッセージは、単なる知識の習得に留まらず、人生を豊かにし、将来の選択肢を広げるための総合的な成長を促すものである。

Ⅲ. 卒業生アンケート(卒業後の既卒者向けアンケート)についての総括

2024年度の流通科学大学卒業生アンケートから、本学の教育成果と今後の改善点が明らかになった。卒業生の多様な声は、大学が社会で通用する人材育成に貢献している一方で、さらなる発展の可能性を示唆している。

卒業生の66%が民間企業に勤務しており、本学の実学重視の学びが社会のニーズに応えていることが分かる。約11%が自営業を選択している点は、多様なキャリアパスへの対応力を示している。

教育内容では、学部専門科目と研究演習（ゼミ）が最も高く評価された。ゼミは特に、卒業後にその有用性を強く実感する声が多く、実践的なスキル習得に貢献していることが示唆される。一方で、外国語科目や健康スポーツ科目は、卒業後に満足度が低下する傾向が見られた。情報処理科目では「かなり役立った」層が増える一方、「全く役立たなかった」層も増加し、評価の二極化が見られる。また、卒業論文やインターンシップは、それぞれ約2割、半数以上が未経験であり、経験機会の拡大が課題である。

施設面では食堂やカフェテリアが好評で、就職活動における職員の親身なサポートも高く評価されている。しかし、大学の偏差値維持への懸念、就職支援の多様性不足、教員の指導の質のばらつきなどが改善点として挙げられる。特に、学生の自立を促すサポートへの転換が求められる。

卒業生は後輩に対し、主体的な学びと多様な経験の重要性を強調している。実践的スキル習得に加え、実社会経験や人間関係構築、自己理解を深める多様な活動を推奨している。

流通科学大学は実学重視の教育で成果を上げているが、卒業生の声を基に、教育内容のさらなる実用性向上、実社会で求められる実践的知見を反映した指導体制の強化、キャリア支援の多様化、そして学生の主体性を引き出す環境整備に取り組むことで、未来に向けてより魅力的な大学へと発展できるだろう。

本調査については、今後、回収率を上げるとともに、卒業時アンケート、在学生アンケート、新入生アンケート等とも連携の上、様々な側面からの分析を実施し、大学運営、教育改善について検討することが求められる。